

近未来の情報リテラシー

国立精神・神経センター国府台病院

湯 浅 龍 彦

本誌60巻11号に国立病院総合医学会シンポジウム記録「インフォメーション・リテラシー」が掲載される予定である。「情報リテラシー」とは聞き慣れないことばである。literacyとは筆者が説明されているようにthe ability to read and writeのことである。解釈すれば、「情報リテラシー」とは、「はんらんする情報の中から真に必要なと価値ある情報を見つけ、有効に利用する能力」つまり「情報発見と活用能力」とでも意識できる。

現代はまさにIT時代の真ただ中にあり、実にさまざまな情報が氾濫している。その中から取捨選択し、真に必要な情報に到達する能力は、神業にも匹敵するであろうと思われる。現代においても過去においても情報は何者にも代え難い価値を有するものである。三蔵法師は仏典という情報を求めて何千キロも旅したわけであるし、およそ人間が求める学問、科学は、全て情報化されて初めて価値が明らかになるのである。死蔵されている情報、現実に現れない情報は、例え存在しても無きに等しい。情報は収集され、蓄えられ、新たな装いと意義を付加されて再び発信される。かつては書物に表され、それが今は電波に乗り、コンピュータ技術の進歩とそのネットワークの広がりにより、膨大な情報が瞬時に世界中を駆け巡る時代になったのである。

そのような時代にあって、氾濫する情報の為かかえって価値の高い情報が見失われて、それになかなか近づけないというようなイロニーも生じる訳である。そこで求められるのが「情報リテラシー、即ち情報発見と活用能力」である。

ところで、「情報」とは何であろうか。情報の根源は、およそこの地球上で生を受けたものにとって、それが植物であろうと、細菌であろうと、カビであろうと、ミミズであろうと、生物として生きる為には必須の見過ごしはならない外界からの信号あるいは内的に発生する信号である。神経系はまさにそれらの外的内的信号を察知（検知）するために発達し

たシステムである。高等動物の場合は、末梢神経と中枢神経系、さらには特殊に分化した感覚器を介して情報を取り込んでいる。そのような生体の仕組みが一方に存在する時、その対局、つまり外的な状況においては、情報を伝える手段、メディアが急速に発展変貌しているわけである。しかも生体の許容量を遥かに超えても尚かつ際限なく生体に侵入してくるのが今日の状況である。そのような中で品位の高い情報を発見し、活用する一方、不要な情報、有害な情報を見極める能力も求められるのである。そのような能力は如何にすれば開発されるのであろうか。それが今回のテーマである。

人間が社会を形成する限り、情報には医学生物情報もあれば、芸術、自然科学、社会科学、哲学、歴史、文化、経済、政治、宗教、軍事情報などありとあらゆるものが情報となって、蓄えられ、新たに創造され、発信されている。人の場合、これらの高等な情報処理機構は脳髄にあるので、人における情報処理とは即ち脳の働きそのものであると換言できるのである。その大脳処理能力を遥かに超えた情報が生体に来襲しているのが今日の状況である。この傾向は今後ますます高まるであろう。そうすると人の大脳皮質の処理能力を遥かに超えてしまった情報はいかに処理されるのであろうか。大脳生理学の限界はどこかといった問題にも直面することになる。回答は一つだけ存在する。その答えとはご明察の通り、コンピュータに頼るしかなかろうというのが正解である。

「情報リテラシー」すなわち、情報を見極める能力、有用な情報を一旦しまい込み、必要な時に取り出す能力。人間がますます脳型コンピュータと一体化し、生物の限界を超えつつある、極限への挑戦ということになって行くのかも知れない。近未来に向けて、「情報リテラシー」に卓抜した人類と、そうでない旧型人類に分かれて進化するののかも知れない。草葉の陰のダーウィンがどう嘆くのか。読者諸兄はどちらにくみますか？ 本誌11月号をお楽しみに。